

講演会要旨

開催日：2010年6月8日

会場：20-204

講演者：伊藤千尋

演題：「スペイン語から世界が見える」

私がスペイン語と出会ったのは大学2年だった。知らない世界を見ようと、キューバにサトウキビ刈りの国際ボランティアに行ったのだ。出発前に2か月のスペイン語特修コースで初めてスペイン語を知った。BとVの区別もなく、RもLもラリルレロでいいのだという。うれしくなった。男性形と女性形があるとはいえ、語尾がOかAかを見ればわかる。英語よりもはるかにとっつきやすい。現地でキューバ人と話しているうちに3か月で日常会話は不自由なくなった。

新聞記者としてラテンアメリカの特派員になり、ブラジルに住んで中南米33か国を一人で受け持った。3年間で飛行機に400回乗った。内戦をしていたニカラグア、ゲリラ戦が起きたペルー、地震のメキシコ、独裁のチリなどあちこち取材した。同じスペイン語と言っても、方言があることを知った。メキシコ人の特有の言葉、アルゼンチン人に固有のアクセントなどがある。1分も話せば、相手がどの国の人かわかる。さらにラテンアメリカの国民性が、スペインのどの地方からの移民かで違うこともわかった。チリ人の勤勉さはバスク移民に由来するし、コスタリカの社会性はカタルーニャから来ている。

その後、オリンピックが開かれた際に、新しく開設されたスペインのバルセロナ支局長に就任した。バルセロナは詩人の街だ。神秘的協会を設計したガウディ、絵画の詩人と呼ばれたミロ、音楽の詩人カザルス。街には「絵のスーパー」もあった。日本のようなせかせかした空気はなく、ゆったりとした人間性が街にあふれていた。

スペイン語を知れば、スペインだけでなくラテンアメリカで通じる。さらに南欧のイタリアや東欧のルーマニアでも会話ができる。フランス語もラテン文化圏だし、欧州の南部はこれを突破口に制覇できる。北部のゲルマン文化圏は英語を突破口にすればいい。スペイン語を使って世界に出ようじゃないか。

どうやったら習得できるかって？ とにかく実践あるのみ。

1. 開催日：2010年10月22日（木）
2. 会場：23-309 教室
3. 講演者：中村又蔵氏（歌舞伎役者）
4. 演題：「海外で歌舞伎を演じる」

上智大学卒で外国語に堪能な異色の歌舞伎役者、中村又蔵氏による講演。氏は、ハワイ大学やミュンヘン大学で演劇の講師を務めたほか、ベルリン、ワシントン、ローマ、ロンドンなどで歌舞伎のレクチャーやワークショップをおこなってきた人物である。英文によるものをふくめて、歌舞伎に関する著書数点もある。

この日の講義は、歌舞伎を見た者がほとんどいないという聴衆、学生約60名の水準に合わせ、入門

的な話と着物姿での実演とを組み合わせたものとなった。なお、外国での指導経験については、「偉ぶっているようで嫌だから」という気さくな人柄らしい理由で、ふれられなかった。

氏は、歌舞伎役者の家に育って幼少から演技を仕込まれたのではなく、大学を卒業してから歌舞伎の世界に飛び込んだ人である。この日の話では、名優故中村又五郎への弟子入り、国立劇場での名題試験への合格、松竹株式会社からの一時的分離、名女優故水谷八重子との共演、歌舞伎座と新橋演舞場との相違、……といった興味深い思い出話が語られた。

実演の部では、大きく分けて、ふたつのことがおこなわれた。ひとつは、国立劇場の研修所で講師をしたときに氏がかならず指導したという、笑い方、とりわけ男女の笑いの演じ分け。もうひとつは、同一の音楽にあわせながらの、男踊りと女踊りとの演じ分けだった。

講演に出席した学生達のアンケートには、高齢で華奢な身体から出るものとは思えない笑いの迫力や、同一人物が男と女を鮮やかに演じ分けることへの驚きが記された。そして、何よりも、本物の歌舞伎役者を間近に見ることができたことへの感謝を記した学生が多かった。

(鳥越輝昭)

1. 開催日：2010年10月27日（水）
2. 会 場：17号館 216教室
3. 講演者：小峯和明（立教大学教授）
4. 演 題：琉球と異文化交流—薩摩の琉球侵略前後をめぐる
5. 要 旨：

「説話」は海を越え、国境を越え、文化や民族の違いを越え、流通する。

日本の古代中世説話を専門に研究してこられた小峯和明氏は、自らの研究対象である「説話」の、この、東アジア漢字文化圏における広域的な伝承流過程を跡付けるなか、重要なトポスとして琉球を位置づけ、精力的な研究活動を展開してこられた。それらの問題意識を踏まえ、今回の講演会では、「薩摩入り（戦国大名島津氏による琉球の実効支配）」前後の琉球の文化状況を、具体的テキストを通じて批判的に浮かび上がらせる手法をとられた。

最初に「1. 東アジアへの視座」として、国民国家によって縦割りされた「一国」史観への批判が組上に載せられ、東アジア全域に視野を広げ、その中に自文化を位置づける必要性が強調された。ついで「2. 東アジアの文化・文化史」として、金文京氏の近著『漢文と東アジア』（岩波新書）に依拠しつつ、文字媒体としての漢字・漢文の重要性に言及し、東アジア圏における国際共通語であった漢字・漢文を媒体として、様々な文物が広く東アジアに流通伝播していった経過を跡付けた。

ここまでの総論部分で、以下に各論として、「3. 東アジアの要石・捨石としての沖縄」においては、古代から近現代に至るまでの日本と沖縄との非対称的な歴史関係が批判的に論じられ、「4. 東アジアとしての琉球」では、日本の一地方へとその位置づけを矮小化されてしまった沖縄・琉球の歴史と文化を、広く東アジア的視点から捉えなおす提言がなされた。

小峯氏の批判はさらに琉球をめぐる従来の研究方法にも及び、「5. 琉球文学研究の方位」においては、日本にとって都合のいい、オリエンタリズムの視点の介在を、そこに見てとっている。以上を踏まえ、最後は「薩摩の琉球侵略前後の言説—袋中、冊封使記録、薩琉軍記から」と題して、各種テキストに見えるオリエンタリズム的視点の批判的分析が行われた。

以上
(文責：深澤徹)